

小学生の学習意欲を高めるマルチメディア教材を用いた 認知症啓発教育の実践と評価

Practice and evaluation of dementia enlightenment education using multimedia teaching materials to enhance elementary school student motivation

梶田 聖子, 村嶋 琴佳, 真嶋 由貴恵
Seiko MASUDA, Kotoka MURASHIMA, Yukie MAJIMA
人間社会システム科学研究科
Graduate School of Humanities and Sustainable System Sciences
大阪府立大学
OSAKA Prefecture University
Email: s-masuda@kis.osakafu-u.ac.jp

あらまし：認知症高齢者数が増加する中、認知症は誰もが関わる身近な病気となったことから、小学生に対する認知症啓発教育が行われるようになってきているが、効果的な学習形態についての研究は少ない状況にある。そこで本研究では、小学生の学習意欲を高め、興味関心をもって実践的に認知症に関して学ぶことができるよう、スライド教材とコミュニケーションロボット Pepper、クリッカーを組み合わせた認知症啓発教育を実践した結果、認知症に関する理解を深めることができた。

キーワード：小学生、認知症啓発教育、マルチメディア教材

1. はじめに

厚生労働省の報告⁽¹⁾によると、認知症高齢者数は2025年には700万人、65歳以上の5人に1人に達するとされている。今や認知症は誰もが関わる身近な病気であり、認知症の人ができる限り住み慣れた地域で自分らしく暮らし続けることができる社会の実現を目指し、「認知症施策推進総合戦略～認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて～」(新オレンジプラン)を策定した⁽²⁾。その中で、「認知症を理解するための普及啓発の推進」のため、認知症サポーター養成研修が全国で開催されている。特に小学生の年代のサポーター養成講座受講者は累計200万人を超え⁽³⁾、認知症サポーターとして認知症に対する理解を基盤として実践的な活動が求められている⁽⁴⁾。

認知症啓発教育で使用される小学生向け教材は、開催者側に委ねられ、効果的な学習形態についての研究は少ない状況にある。小学生が認知症高齢者を正しく理解し、近隣の認知症の人や家族に対して、自分なりにできることを実践する力を育成するためには、認知症への興味関心、学習意欲を高め、学習効果を期待できる教材開発が必要と考える。そこで本研究では、小学生向けの学習形態として、視聴覚的技法によって教育効果が期待されるマルチメディア教材を活用することが有効と考えた。教材は、スライド教材とコミュニケーションロボット Pepper、クリッカーを組み合わせた認知症啓発教育を実践し、その評価を行った。

2. 対象

2016～2017年、H県の3地区(K地区、S地区、B地区)でポスターによる募集を行い、希望のあった小

学生38名とした。

3. 教材開発

3.1 学習目標：

- ①学習者が認知症を含む高齢者への理解を深めることができる。
- ②困っている高齢者を見かけた場合、大人に知らせることができる。

3.2 教材開発

教材の内容および構成は、認知症高齢者見守りネットワークメンバーと検討し、高齢者への尊厳・肯定的理解ができる内容とした。前半部分で、高齢者への肯定的なイメージをつけ、後半部分では認知症高齢者の理解と接し方、声のかけ方について具体的に学ぶことができるように工夫した。教材開発にあたっては、学習意欲を引き出すためにARCSモデル⁽⁵⁾を用いた。ケラーは、学習意欲に関連する要因を「Attention(注意)」、「Relevance(関連性)」、「Confidence(自信)」、「Satisfaction」の4つに分類している。今回の教材では、「Attention(注意)」は、学習者の好奇心・興味を刺激・持続させるために、親しみやすいイラストと参加者の祖父母を通して考えることができるスライド教材、コミュニケーションロボット pepperによるクイズや要点の説明を行った。関心を持続するため、クイズの回答結果をクリッカーで即座に提示した。「Relevance(関連性)」では、小学生が自分の祖父母が認知症になった場合を想定し、認知症高齢者への理解を深め対応できるように、学習体験の意義を感じ、全ての人が住みやすい地域になることが実感できるストーリー性を持った教材とした。「Confidence(自信)」では、成功へ

の期待感を持てるように、認知症高齢者への声のかけ方や大人に知らせるタイミングを学び、「地域で認知症を疑う高齢者を見かけた場合、大人に伝えることができる」ことが達成できるようにした。「Satisfaction（満足感）」は、小学生がこの研修に満足し、さらに学びたい気持ちを引き出すこと、参加者が認知症高齢者への理解が深まったと実感できるよう、学習前後に認知症高齢者の理解に関する質問を行った。また、参加者が「自分でもできることがある」との自覚を促すために、研修終了後にオレンジリングを配布した。

3.3 倫理的配慮

認知症サポーター研修会で研究協力を依頼する際、関西医療大学研究倫理委員会に申請、承認を得た。認知症高齢者見守りネットワークの事務局で、認知症地域支援推進員が所属する地域包括支援センターの担当者に研究の趣旨・方法を文書と口頭で説明、承認を得た。参加者児童と保護者には、認知症サポーター研修の当日、に文書と口頭で研究の趣旨・方法を説明、同意書の提出をもって同意を得た。

4. 結果と考察

4.1 参加者の状況

参加者数は、K 地区 11 名、S 地区 15 名、B 地区 12 名、計 38 名であった。年齢は、K 地区 11 名中 7 名(63.6%)が小学低学年で小学高学年は 4 名(36.4%)であった。S 地区では全員が小学高学年であった。B 地区では、12 名中 3 名(25.0%)が小学低学年で 9 名(75.0%)が小学高学年であった。

4.2 マルチメディア教材による学習効果

研修会後アンケートによる「スライド教材は分かりやすかったですか」については、「わかりやすかった」と回答したのは 38 名中 35 名(92.1%)であった。自由記述では、「カラフルな絵と図、大きな文字でわかりやすかった」、「スライドショーが面白かった」との記述があった。スライド教材は、親しみやすいイラストと参加者の祖父母を通して高齢者のイメージを広げたことから、参加者の興味関心を高め、認知症への理解を深めたと考える。「Pepper の話はわかりやすかったですか」については、38 名中 36 名(95.0%)が「とてもわかりやすかった」、「わかりやすかった」と回答した。しかし、自由記述では、「急に話が止まったりして聴き取りにくかった」、「片言だった」との記述があり、聴き取りやすいスピード、声のトーンに調整することが必要である。「クリッカーを使うとわかりやすかったですか」については、全員が「大変そう思う」、「思う」と答えた。クリッカーに関する自由記述では、「他の人の考えがわかってよかった」との記述があり、興味関心の持続に役立ったと考える。

4.3 研修前後における認知症に関する理解の比較

研修会前後における認知症に関する理解の比較を

表 1 に示す。研修前後で有意差の見られた項目は、「認知症は誰でもなる病気」(p<0.001)、「困っているのは認知症の人とその家族」(p<0.002)、「近所の見守りネットワークを知っている」(p<0.004)であった。参加者の多くは認知症への理解を深めたが、困っている高齢者への声かけへの自信をつけるためには、子供の目線で実践的に認知症高齢者への支援を学ぶ機会をつくる必要があると考える。

表 1 研修会前後における認知症に関する理解の比較 n=38

| 項目 | 研修会前 | | | 研修会后 | | | p |
|--------------------------------|----------|----------|-----------|----------|----------|-----------|---------|
| | はい人(%) | いいえ人(%) | わからない人(%) | はい人(%) | いいえ人(%) | わからない人(%) | |
| 認知症は誰でもなる病気 | 15(39.5) | 12(31.6) | 11(28.9) | 35(92.1) | 2(5.3) | 1(2.6) | <0.001* |
| 困っているのは認知症の人とその家族 | 22(57.9) | 3(7.9) | 13(34.2) | 35(92.1) | 1(2.6) | 2(5.3) | 0.002* |
| 困っている人を助けてくれる人がいるまちはみんなが暮らしやすい | 34(89.5) | 1(2.6) | 3(7.9) | 37(97.4) | 1(2.6) | 0(0.0) | 0.102 |
| 困っている人がいたら助けたいと思う | 33(86.8) | 1(2.6) | 4(10.5) | 35(92.1) | 0(0.0) | 3(7.9) | 0.276 |
| 近所の見守りネットワークを知っている | 5(13.2) | 24(63.2) | 9(23.6) | 18(63.6) | 11(28.9) | 8(21.1) | 0.004* |

Wilcoxon の符号付順位検定 *p<0.05 で有意差あり

5. 結論

小学生の認知症啓発教育の学習形態としてマルチメディア教材を組み合わせて活用することは、小学生に興味関心をもたせ、認知症への理解を深めることに役立つと考える。

参考文献

- (1) 厚生労働省：“認知症高齢者数について”，<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000002iau1-att/2r9852000002iavi.pdf> (参照 2018.6.10)
- (2) 厚生労働省：“認知症施策推進総合戦略(新オレンジプラン)～認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて～(概要)”，http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12300000-Roukenkyoku/nop1-2_3.pdf (参照 2018.6.11)
- (3) 全国キャラバン・メイト連絡協議会：“認知症サポーターキャラバンサポーターの養成状況”，<http://www.caravanmate.com/result/> (参照 2018.6.10)
- (4) 厚生労働省；“認知症サポーター”，<http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000089508.html> (参照 2018.6.10)
- (5) J.M.ケラー著，鈴木克明監訳：“学習意欲をデザインする ARCS モデルによるインストラクショナルデザイン”，北大路書房，京都(2010)